

BIO Clinica 創刊 500 号記念に思う

くろかわ きよし
黒川 清

東京大学名誉教授
政策研究大学院大学名誉教授
東海大学特別栄誉教授
「BIO Clinica」編集委員長



医学、生命科学分野の学生、大学院生、教員、また研究所や企業などで研究にかかわっている人たちにとって、無意識、意識下でも憧れの賞が3つある。ガードナー賞、ラスカー賞、そしてノーベル賞である。確かにそれは果てしない憧れではあるが、実際に研究を始めている大学院生や研究者である若者たちにとっては「夢」とはいつでも、ささやかな可能性をもった、実現可能かもしれない世界に足を踏み入れたように感じる時々もあるだろう。

医学・生命科学の分野では、ノーベル賞をトップとしてラスカー賞、ガードナー賞があるが、ノーベル賞は他の賞に比べてニュース性とインパクトが圧倒的に違う、なぜか？

多くの研究者も、ガードナー賞やラスカー賞を受賞した人は、ノーベル賞に一步近づいた、と考えるに違いない。

ノーベル賞は20世紀初めにダイナマイトの発明者として知られるアルフレッド・ノーベルの遺言によって始まった。物理学、化学、医学・生理学、文学、平和及び、1969年に加えられた経済学の分野がある。賞金の額は当時から巨額であったこともインパクトが大きかった。米グーグルの創業者らが出資する科学賞「ブレイクスルー賞」など最近では賞金の額がさらに大きい賞もできているが、さすがにノーベル賞、その伝統はゆるぎ

ない。選考は物理学、化学、経済学の3部門はスウェーデンの王立科学アカデミー（The Royal Swedish Academy of Science）が、医学・生理学はカロリンスカ研究所（Karolinska Institutet）が、平和賞はノルウェーのノーベル委員会（The Norwegian Nobel Committee）が、文学賞はスウェーデン・アカデミー（The Swedish Academy）が行う。

ラスカー賞はアメリカのラスカー財団によって1945年に設立され、医学の研究において優れた功績があった人に与えられる。最初の授賞は1946年に始まった。ガードナー国際賞は、1957年設立のカナダのガードナー財団によって医学に対して顕著な発見や貢献を行った者に与えられる賞で1959年から受賞、2009年にはガードナー国際保健賞を加えている。

私は医学・生理学分野の選考に関係する人を10年余のアメリカ生活の頃から何人か知っているが、ガードナー賞、ラスカー賞はいつもノーベル賞を取りそうな人を先んじて選びたい、という議論が出てくるようだ。学会などで会う機会には、ノーベル賞の話題になるが、決して内部のことは教えてくれない。長期的な視点で可能性のある人々をリストアップして、研究成果をアップデートしながら毎年の発表になるのだな、と感心する。

黒川 清 (医学博士)

東京大学・政策研究大学院大学名誉教授、東海大学特別栄誉教授
日本医療政策機構代表理事

1969～84年 在米

1979年 UCLA 医学部内科教授

1989年 東大医学部教授

1996年 東海大医学部長などを経て現職

国際腎臓学会理事長、国際内科学会会長など国際科学者連合体の役員等を務め、WHO コミッショナー (2005-08年)、日本学術会議会長および内閣府総合科学技術会議議員 (2003-06年)、内閣特別顧問 (2006-08年)、国会の立法による東京電力福島原発事故調査委員会委員長 (2011-12年)などを歴任。現在は新型コロナ対策の効果を検証する国のAIアドバイザー・ボード委員長 (2020年-)、世界認知症審議会 (G8 World Dementia Council) 副議長 (2021年-)

ブログ：<http://www.KiyoshiKurokawa.com/jp>

毎年ノーベル賞の発表がある10月の初めの数日は、私たちが「日本からもしや」、と誤ってしまう。

この3年間のコロナ・パンデミックで大きな活躍をした一人が、mRNAでコロナ・ウイルスのワクチンの作成をしたカリコ博士である。2021年にラスカー賞、2022年にガードナー賞を受賞した。次はいよいよノーベル賞、との期待が大きかったが、ノーベル賞の発表では全く違っていた。2021年はアメリカのカリフォルニア大学サンフランシスコ校のデビッド・ジュリアス氏とスクリップス研究所のアーデム・パタプティアン氏、そして今年「人類の進化」に関する研究で大きな貢献をした、ドイツのスバンテ・ペーボ博士が選ばれた。10月という1年の終わり近くに発表されるノーベル賞は、ご存じの通り多くの人の予測を裏切った形になったが、私はさすがノーベル賞、と思わされる。

選考について、当然のことだが絶対に他言をしない関係者を思いながら、ノーベル賞は、中長期的な、確かなビジョンを持っている、と思っている。これぞ、という人をピックアップし、リストを作成し、彼・彼女らの研究の進捗と社会的インパクトに注目し、最新の業績をリストに加えながら、どういうタイミングで、各年のテーマと受賞者にするか、いかにも北欧の人のものの考え方だと思ふことがある。

ノルウェー、フィンランド、スウェーデンを訪問する機会が何回もあったが、秋でも寒いし、冬の寒さはとても厳しい。2015年12月には、大村智先生のノーベル賞授賞式に参加する機会をいただいたのだが、さすが12月の寒さ、このような寒い冬に住む国の人たちのもの見方、考え方がしっかりした選考にお国柄が出ている、と感じる。

コロナのパンデミックを受けて2022年、ハンガリー生まれのカリコ医学博士が優れた業績をあげた研究者に贈られる「日本国際賞」を受賞した。私は駐日ハンガリー大使館での歓迎レセプションで博士にお会いした。彼女の研究者としての背景とお人柄を知るにつけ、さすが、と思ったものだ。ハンガリーの方によると、ノーベル賞受賞は人口に比例してハンガリー人は多いのだ、と言われていたからかもしれない。

カリコ博士が今年のノーベル賞、と考えた人は少なくなかったと思ったのだが、そうでなかった。ノーベル賞の発想は違う。北欧の人らしい、20世紀の初めに始まり、すでに120年を超えても、なお、みんなの一番の憧れであり続ける。なんとなくスカンジナビアの背景を考えながら感じる個人的で、直観的な私の感想である。